

女の子グループにおける ピア・プレッシャー

一人になるのが怖い女の子たち

本稿を書き始めようとすると電話が鳴った。知り合いの先生だった。小学校六年生を担任する彼は、熱心な勉強家である。その彼が、「ちょっと、女子が二学期くらいからうまくないんですわ」と苦しそうに言う。女の子のグループが、担任の批判を始めたらしい。一生懸命で力量のあるといわれる先生でも「女の子だけはわからない」と訴える。私も昨年の三月まで小学校で学級担任をしていたので、彼らの言っていることは実によくわかる。

いわゆる小学校高学年女子の問題である。若い男性教

上越教育大学教職大学院准教授

赤坂真二 あかさか しんじ

師が一度はくぐる試練だと思っていた。しかし、今は、ベテランも女性教師も指導に困難を感じている。とくに難しいのが、グループ化に対する対応である。

そのグループは「鉄の結束」のもとに、教師への反抗も辞さない。また、グループが対立を始めると教室全体を巻き込み、さまざまな教育活動に支障を来す。「鉄の結束」の集団が一枚岩かというところでもない。グループ内では、発言力の強い子が、弱い子を言いなりにする。言いなりになっている子は、決して自分の意見がないわけではない。しかし、グループから外されるのが怖いから、自分の気持ちを隠す。そうしたストレスが溜まり、ある日、突然学校に行けなくなってしまうというよ

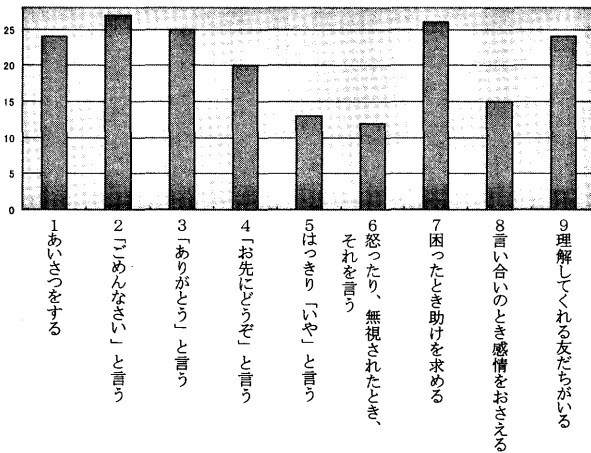


図1 コミュニケーションにかかわるアンケートの結果

うなことが起こる。大きなグループ内では、小さなグループの対立も頻繁に起きている。お互いに悪口を言うがグループを決裂させるような対立はしない。全員が集まればそれなりにうまく調子を合わせる。しかし、いつも悪口を言われているような気がして安心して過ごせない。グループのメンバーが好きだから一緒にいるわけではない。一人になるのが怖いから一緒にいる場合も多い

のである。

図1をご覧いただきたい。これは、皆川(1)を参考に私が担任した六年生(二八名)に実施した友だちとのコミュニケーションにかかわるアンケートの結果である。それぞれの質問項目に対し、「はい」か「いいえ」で答える。これを見ると、「5 『いや』と言いたいときに、はっきりそう言っていますか」「6 友達があなただを怒らせたり無視したりしたときは、それを言っていますか」の項目が低い。不快な気持ちになったときに相手にそれを伝えることできる子どもがクラスの半数以下であることがわかる。これらの項目に「いいえ」と答えたのは、圧倒的に女の子が多かった。自分の気持ちを押し隠して、友だちと過ごしている女の子が少なからずいることがわかる。調査を行ったとき、質問紙を配った途端に、女の子たちから、「え? 先生、『いや』って言うっていいの?」という声があがったほどである。そこには、いわゆる「同調圧力」とか「ピア・プレッシャー」と呼ばれる力に縛られている女の子たちの姿を見ることができた。

グループ化の目的

それでは、なぜ女の子たちは、自分の気持ちを押しさえてまでグループでいようとするのだろうか。私もグループ化を目的にしたりしたとき、彼女たちが、グループに固執する理由がわからなかった。しかし、目的論という考え方を知ったときに、今まで闇のなかにあったグループ化のメカニズムが、読み解けてきた。

私はそれまで、子どもの行動（とくに問題行動）を考へるときに、「この子はこうしてこんなことをするのだろうか」と、原因を追求しようとしていた。つまり、原因論で問題を把握しようとしていたわけである。すると、「この子には生まれたばかりの弟がいて、寂しいからグループをつくるのだな」とか「自信がないからグループで行動するのだ」といった家庭の問題や性格の問題に行き当たってしまった。家庭の事情や性格の問題にしてしまふと、そこからどうしていいかわからなくなることもあった。しかし、目的論では、物事が起こるには目的があると考えられる。つまり「女の子のグループ化にも目的がある」と考えるわけである。それでは、女の子のグループ化にはどんな目的があるのだろうか。

目的論に立つ代表的な心理学として、アドラー心理学がある。アドラー心理学とはオーストリアの精神科医のアルフレッド・アドラーの構築した心理学理論である。アドラー心理学では、「人間の行動には目的がある」そして、その目的は、「何かに所属すること」だということ⁽²⁾。人は、集団に居場所を求め存在だということである。これを教室に当てはめて考えると、子どもの教室での行動には目的があり、その目的は、学級に居場所を求めることだと考えることができるだろう。

教室における居場所とは何であろうか。居場所を考へるときに教室を他の場所に置き換えるとわかりやすい。私たちがパーティーや宴会に参加したとき、まず、何を考へようか。おそらく、座席を確保するか知り合いを探すかであろう。座席は空間的な身の置き所である。知り合いは、精神的な身の置き所である。人混みのなかや初めての土地で、たった一人ではとても心細いが、知り合いが一人でもいると心細さはかなり軽減される。

教室では、子どもたちには一人ひとり座席がある。つまり、空間的な居場所が確保されている。したがって、精神的な居場所がとても重要な意味をもつ。居場所づくりの行動は子どもによって違う。学習をがんばったり、

係活動や当番活動に積極的に参加したりする子どもがいます。建設的な行動で周囲とかかわることで認められるなどして自分の居場所をつくる。一方で、ふぎけたり仕事をさぼったりして、居場所をつくる子どももいます。注意されたり嫌がられたりして、周囲の注目を引くことで人とかかわるのである。教室での居場所づくりは、人とかかわりのなかで実現されるのである。女の子のグループ化は、居場所づくりのための行動の一つだととらえることができなだろうか。居場所づくりは、人の根源的な欲求から起こる。よって、女の子のグループ化は、それ自体は問題行動ではなくきわめて自然な日常行動なのである。

女の子のグループの特別な事情

グループ化というとすぐに女の子がイメージされるが、教室でグループをつくっているのは女の子だけではない。男の子だって、グループをつくる。しかし、女の子のそれがしばしば問題視されるのは、その閉鎖性にあるのではないだろうか。ではなぜ、女の子のグループは閉鎖的になるのだろうか。

男の子のグループは、いうなれば「仕事集団」であ

る。野球が好き、同じゲームをもっているなどの共通の趣味や嗜好をもつ集団であることが多い。一緒に好きなことをすることが目的の集団である。男の子にとってグループ化は、好きなことをより楽しく実行するための手段である。だから、誰が入ってきてもいいし抜けてもいい。よって比較的開放的なグループを形成する（しかし、最近はどうでもない場合も見られる。「よい子」志向が強まり、他者と同調することを重視する男の子も増えている。男の子のグループも質が変わってきているのではないだろうか）。それに対し、居場所としてのグループを形成する女の子は、一緒に何かすることが目的というより「一緒にいること」が目的となっている。グループ化は手段であり、目的なのである。野球をして遊ぶならば、どう野球を楽しむかが大切なことである。一方、居場所としてのグループは、人とかかわりのなかで実現されるものなので、人、つまり、誰といるかが重要な関心事なのである。居場所は、根源的な欲求と結びついているので安定感が必要である。それは同時に快適さも求める。だから、メンバーがちょくちょく入れ替わっては困るのである。しかし、不快な場合は一刻も早く改善が求められる。だから女の子のグループは、「鉄の

結束」を誇るように閉鎖的でありながら、ある日突然、バツサリとメンバーを切り捨てようなことをする。

居場所を奪われることは、存在を否定されることである。しかも、ある日、突然居場所を失うかもしれないことや一度居場所を失ったら、容易にそれを見つけないことができないことを女の子たちは知っている。本音を隠しても、自分を傷つけても、存在を否定されるよりはずつといい。だから、女の子たちは、一人になることを恐れ、グループに居続けようとする。

このごろの事情——自信のない子どもたち

しかし、女の子のグループのピア・プレッシャーは、今に始まったことではない。このことが今、問題視されるのには、今日的な事情があるからだろう。

さまざまな要因があるだろうが、その一つとして子どもたちの自信のなさに注目している。今は低学年のころから「自分が嫌い」と言い切る子どもが少なからずいる。自己をアピールすることを嫌う風潮のなかでますます自信を失う子どもが増えているように感じる。自信のない子どもたちは、常に自分がどう見られるかを気にしている。人にどれくらい好かれるかで自分を計るのであ

る。それに加えて、学級などの子ども集団のつながりがあります希薄になっていることは、無視できない要因である。不安定な人間関係のなかで、自信のない子どもたちが居場所としてのグループにしがみつき、それはより強固になり、閉鎖的になる。がんばりがための関係のなかでさらに言いたいことが言えなくなる。やがて、自分の意志すら見失う。

しかし、良好な人間関係の学級では、女の子はグループを形成しても、対立はしない。女の子の力で、建設的で規律ある学級風土が形成されたことはこれまで経験上何度もある。女の子の本来の力を引き出すためには、学級や部活動などの所属集団の安心して過ごせる人間関係をつくっていくことが急務であり、必須の課題である。

【主な参考文献】

- (1) 皆川興栄『総合的学習でするライフスキルトレーニング』明治図書、一九九九
- (2) ドン・ディンクマイヤー、ルドルフ・ドレイカース著、柳平彬訳『子どものやる気』創元社、一九八五